

と 経営 健康

第7回

生き残りへ 智略縦横 真田三代

講談師 一龍斎貞花

大企業の後継者となったボンボン。支える側近も経営能力無し。折角外部から雇った実力者を起用せず、遂には倒産というケース、少なくありません。

「秀頼公に大坂城よりご出馬頂けば、豊臣恩顧の者味方するは必定」

という幸村の策も、大野治長ら側近に反対され、さればと真田丸を建てて、徳川方を苦しめるも、「和議などあり得ぬ」と、強硬論の淀君も、自分の部屋に大砲を撃ち込まれるやふるえ上がり、徳川と和睦。堀総てを埋められ裸同然。ここでも堀を埋める和睦条件に反対するも受け入れられず、真田丸も破却され滅亡へと向かってしまった。

「桐一葉落ち 天下の秋を知る」
お芝居でもおなじみ家老の片桐且元

も意見の違い、方広寺鐘銘問題もあり、戦いの前に大坂を離れ徳川に加わった。苦戦の中で、有能な人材を失い、意見も聞き入れない。

他山の石として頂きたい。

幸村は最後の戦いを前に、直江兼統に会いたかった。家康をはねつけた上杉も、関ヶ原合戦に敗北を喫するや、家名存続のため、徳川の傘下となり大働きをしている。

「真田丸の戦いお見事でござった。流石は幸村殿」

「兼統殿も、今や徳川方……」

「関ヶ原の折、打倒徳川の千載一遇の好機を逸し夢果たせず、今は家臣・領民のため唇かんで徳川に従うより致し方なし。真田家も生き残るための道を

歩まれたが、昌幸殿譲りの反骨の血を受け継ぎ、幸村殿は己れの道を歩まれとおる」

「いかにも。好条件の誘いより誠を貫きとうござる。己れの義を天下に示し最後まで勝負はあきらめません」

「それでこそ幸村殿」

お互いを認め合う二人は、盃を交わし右と左に分れたのでございました。

真田も生き残りのため、信之・幸村兄弟は、東西に分かれたのです。

真田日本一の兵

幸村は、敵の裏をかいて家康の本陣だった茶臼山、今の天王寺公園に陣を構えます。東軍伊達家も茶臼山に布陣し近い場所で対峙します。

七十四歳の家康は、人生最後の総仕上げと、二十万の大軍をもって大坂城を取り囲んだ。

「かくなる上は、秀頼様自らご出馬下されたい。徳川方についている、福島、加藤、池田はじめ豊臣ゆかりの諸侯、秀頼公に弓引くこと出来ず兵を引くこととでございませう。某家康の本陣へ斬り込み首を挙げて参ります」

しかし起死回生の策も

「総大将の出馬は許さぬ」と却下され大坂城の運命は決まった。

五月五日、後藤又兵衛、薄田隼人（岩見重太郎）討ち死。

時なるかな元和元年五月の七日、緋織の鎧、白熊の毛つけたる鹿の角の前立打ったる兜を頂き、白河原毛の

愛馬に打ちまたがり、十文字の槍を引
つさげ、

「我に続けーっ」

法螺貝の音高らかに、赤備えの真田
隊三千、一丸となって茶白山を駆け下る。
目指すは金扇の大馬印を掲げたる家康
の本陣。負けじと毛利勝永の一隊も家
康の陣目指してまっしぐら。

徳川一門の松平忠直の一万三千を蹴
散らし

「敵の本陣目の前ぞ進め、進めー」

他に目もくれず一氣に突き進む有
様は、正に阿修羅王の荒れたる如く、
厭離穢土、欣求浄土の旗をはつきりと
とらえた。家康を守る旗本の面々、先
陣が切り崩されるとは思ってもみなか
った。

突如現れた六連銭の旗印、赤備えの
一隊に驚天。

家康は二度まで切腹を覚悟したほど。
わずかな人数に守られて逃げける家康。

「真田左衛門幸村、見参！」

まっしぐらに馬を走らせる。必死に
防ぎ止めんとする旗本衆。おのれ逃が
してなるものか、真田勢死力を尽くし
て戦うも、次々と駆けつける徳川勢と

あつて多勢に無勢、戦い疲れたる真田
隊。流石の幸村も戦い疲れ、手傷を負い、
天王寺の安居神社附近の田の畔道に坐
り込んでいるところを、松平忠直家臣、
西尾久作のために討ち取られたのでご
ざいました。

自ら信ずる道を貫き、壮烈なる働き
に、薩摩藩主島津忠恒は

「真田日本一の兵」よと絶賛。

幸村は四十九歳をもって戦場の露と
消えました。かくして大坂落城。淀君、
秀頼親子自害。幸村の一子大助も秀頼
と運命を共にしたのでございました。

真田家その後

幸村の妻お竹は、娘たちと逃れたも
のの、捕えられ家康の元に送られたが、
幸村の武勇を認め釈放。お竹は、七女
おかねの嫁ぎ先石川家で晩年を送り、
三女で側室の子お梅は、幸村と激しく
戦った伊達家の家臣二代目片倉小十郎
に「お梅をかくまって頂きたい」と手
紙を書き、小十郎は政宗の許しを得て
腰元とし、幸村の娘ということを隠す
ため家来にも明かさず、家来たちは後

年にやつと幸村の娘と知つたと申しま
す。正室の指月院は病弱で、才色兼備
のお梅に、

「我亡きあと夫を頼みます」と、頼
んでなくなり、小十郎はお梅を後妻と
し、小十郎三十七歳、お梅十七歳。お
梅は小十郎を支え、家臣からも慕われ
七十八歳で亡くなり、白石の当信寺に

お墓があり、そのお墓は如意輪観音を
かたどつたもので、齒が痛くて頬を押
さえているように見えることから、齒
痛の妙薬として墓石を削つて飲む人が
多く原型を留めていません。お梅を頼
つて次男大八、六女菖蒲も白石で過ごし
ました。

大八が仙台藩士となり、子孫が十四
代目として続いています。

兄の信之を支え続けた小松姫は、大
坂落城からわずか五年後の元和六年、
四十八歳で亡くなり、この時信之は、
「我が家の灯りが消えた」と、嘆き悲
しんだと申します。

信之は、大坂冬の陣、夏の陣に手柄
を立て、元和八年松代へ転封。沼田と
合せ十三万石の大名に出世。信之は戦
国の動乱で荒廃した沼田領の復興に積

極的に取り組み、天正十八年の暮れに
は早くも検地を完了、沼田築城、城下
町の整備、街道の整備、逃散した農民
に対し環住政策をとるなど、初代藩主
として輝かしい足跡を残し、真田家が
あくまでも固執した沼田を守り栄えさ
せたのでございしました。

信之は、妻の倍の九十三歳まで生き、
一方の松代藩も、「日暮硯」財政改革を
成し遂げた恩田木工、幕末の傑物佐久
間象山らを輩出し、徳川幕府の終焉ま
で続き、昌幸の家名存続の願いが叶え
られたのでございします。

親子兄弟の権力争いは、昔も今も続
いています。そうした中、形の上では
親子兄弟が敵対したものの、心情はと
もに暖かく家を存続させたのです。

企業存続の大切さ、老舗倒産の要因。
小よく大を制した上田城の戦い。
生き残りへ、知略縦横真田三代、こ
れをもつて読み終わりと致します。

今回は、鴻海とシャープはさりなが
ら、今台湾は懐日ブーム。そのきっか
けとなりました映画KANNOの講談化、
嘉義農林甲子園の活躍。ご期待下さい。